

協力会コンペに参加してパーティは失礼し二十三年ぶりに花巻の清掃会社を訪ねた。この会社にコンピュータを納入した頃は会社が出来て二、三年の頃で事務所には五十代の事務の女性と営業職の男性、そして声の大きな六十代後半の代表者の及川由郎さんがいた。六十人位の清掃をする人を市役所や市民会館などに派遣する会社だった。

現在はビルメンテから介護事業などへ事業を拡大し成長している。そして、現在の代表者はまだ三十代であるが十年たらずで岩手県経営品質賞の県会議所連合会長賞を受賞するほどのホスピタリティあふれる企業に変身させている。三十分たらずの訪問であったがそれは至る所に見られた。

接客テーブルに案内した黒いスーツの制服を着た女性が飲み物のメニューを示して希望を聞いてきた。六種類位の中から私はミネラルウォーターをお願いし、コップに入った冷たい水をおいしく頂いた。接客コーナーの壁にはカードに書かれた「お褒めの言葉とクレーム」が二対一ぐらいの割合で貼り付けてある。高校時代の同級生が社長をする大型家電販売チェーン店のメッセージカードがあつたので読んでみた。それは、定休日の清掃時間に担当者が遅れて迷惑をかけたことを謝罪したもので、その後の対応の良さを褒めていた。

訪問の目的は及川社長のお父さんから「及川大将の考えていた事」を聞き出したいと思っていた。一年前、青森の鮭ヶ沢のお客様を訪問する途中、盛岡の先人記念館に立ち寄った。そこには新渡戸稲造や金田一京助、石川啄木らと共に米内光政の遺品が展示されその功績が輝かしく紹介されていた。驚いた事にその中には、及川古志郎の名前も写真の一枚もなかった、どこにでも「樅の木は残った」があるのだろうか。何故、地元の人に評価されていないのだろうか。その謎を突き止めたかった。

なぜか松本清張の「或る小倉日記」や「陸行水行」を思い出す。森鷗外の小倉での行動を日記にまとめようとした息子と母、卑弥呼の邪馬台国を探し求める正体不明の男と一緒に川を下り死んだ造り酒屋の隠居、その知りたいと思う心が行動に移る時、幸福感に満ちる。そんな気持ちに駆り立てられてまた花巻に来た。

私は盛岡ルネサンスの素は新渡戸家ではないかと睨んでいる。それで、前日に花巻の新渡戸稲造記念館に及川古志郎が発見した言葉が眠っているのではないかと訪ねた。稲造直筆の額に「元立末治」と書いてあつた。近いかも知れないがこれではないかと思う。儒学ではなく、もっと仏教的な世界感の中にあるような気がしている。

及川徳雄さんは私より三才年長でプレイしたゴルフ場のメンバーでもあるらしい。前日までタイを旅行してお疲れのところだったが遠来の客を暖かく向えてくれた。

先ず、「及川大将の家が東和町にあるので行って見ましよう」と車に乗せてくれた。皆さんに見送られ「見てからそのまま帰ります」と挨拶をしていると、制服を着た背の高い女子社員が「これをお帰りに食べて下さい」と渡してくれた。よく、結婚式のお開きに新婦が手作りクッキーを籠に入れて渡したりするが、二枚の手作りクッキーが入っていた。リボンの付いた袋にはシールがはってあり「西野さま本日は遠方よりご訪問頂きありがとうございます」と書いてあり、私の会社のマークまで赤く染めて書き浴えてあった。なんとという暖かなもてなしだろうと感激した。

二十分程、車で走ると東和町の役場に着いた。この街には萬鉄五郎の美術館があり前に来たことがある。新渡戸家が土着し開拓をした所に近く、街に文化の香りがする。何か及川古志郎の資料があるだろうと尋ねると、残念ながら歴史資料館が休館日だったので、図書館にも多少あると言われ、町の図書館に電話をしてみよう。

昭和五十八年に「及川古志郎を偲ぶ会」が生誕百年記念に発刊した記念誌があった。規則で半分しかコピーすることが出来ない、残りは徳雄さんが申し込んでくれたので六十数ページの、喉から手がでる程欲しい情報が手に入った。そればかりか、その近くに昭和十六年に改築されたご自宅がまだあった。徳雄さんは、数年前まで親戚が住んでいたと言っていたが、今は庭木に覆われて誰も住んでいる様子はなかった。

その記念誌のあとがきに、「或る本などでは、米英との開戦を止め得なかったとして、島田大将等と共に、「三人でくのぼう」とまで云われている及川先生ではありませんが、昼あんどんと云われたという、大石にも似て、全くつかみどころのない程大きく且つ深いと思われる。」と書かれてあり、秋田経済法科大学学長であった哲学者高山岩男は「及川古志郎先生は和漢洋の学に通じた珍しい軍人哲学者であった」と書いている。

古志郎の父は森鷗外と同じの東大医学部の一期生、盛岡中学の頃は、父が開業医で裕福であったので、啄木などはいつも本を借りていたという。海軍大学を首席で卒業すぐに、東宮武官として十二歳から二十歳になるまでの昭和天皇に仕え、あの日米開戦と終戦を決した御前会議のいずれにも列席していた信任厚き提督である。

昭和三十三年五月、三菱重工の社長を務めた郷古潔は七十五歳で亡くなった盛岡中の同級生であった友人へ弔辞を読み上げていた。

「君は岩手県安俵に連綿十三代にわたり医を業とする名家に生まれましたが、海軍入りを決意、軍人としての最高峰の地位に昇進されました。もとより君の豊かな文才はひとり軍事学に留まらず哲学、宗教、科学等の深奥を極め、然も尚日々研鑽怠ること無き学究心の強き君でありました。・・・君はよく時代の趣向に鑑み、一方、実業の倫理化も説いて甲子会を指導し、他方科学の振興に力を致されました。世界に冠たる電子顕微鏡を生んだ日本電子工学研究所をはじめ・・・」と。思った通りであった。高度成長を生んだ軍事技術の民生品への移転の原点を発見した。平成二十一年十月記